



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	広東語の条件節標識 “嘅”
Author(s)	飯田, 真紀
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 57, 21-33
Issue Date	2009-11-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/40056
Type	departmental bulletin paper
File Information	MSC57-002.pdf



広東語の条件節標識“嘅”

飯 田 真 紀

1. はじめに

本稿は広東語¹の構造助詞“嘅”が条件節を形成する機能を獲得していることを指摘し、その機能拡張のメカニズムを明らかにし、最後に条件節標識としての“嘅”の特徴について、他の条件節標識との比較を交えつつ考察するものである。

広東語の構造助詞“嘅”は次のように連体修飾語句と被修飾語とをつなぐ文法的機能を持つ。

- (1) 佢 嘅 書²

彼 の 本

〔彼の本〕

- (2) 佢 借 俾 我 嘅 書

彼 貸す ～に 私 の 本

〔彼が私に貸してくれた本〕

上記の連体修飾構造から被修飾語たる中心語（“書”）が省略されると、以下のような名詞化構造ができる。

- (3) 佢 嘅

彼 の

〔彼の（もの）〕

- (4) 佢 借 俾 我 嘅

彼 貸す ～に 私 の

〔彼が私に貸してくれたの（もの）〕

他方、本稿が議論しようとする条件節標識の“嘅”とは次の下線部で示したようなものである。

1 本稿で述べる広東語とは主に香港で話されている広東語を指す。

2 本稿では広東語及び標準中国語は繁体字漢字で記す。例文の注釈に用いる用語の簡略名称についてはCL= 類別詞、SP= 文末助詞。

- (5) 你 知唔知 我 係 邊個 呀！ 唔知 嘅，我 嬲 㗎。(網)

あなた 知る-〔否定〕-知る 私 ~だ 誰 SP 〔否定〕-知る 私 怒る

〔私が誰かわかる？ わからなかったら怒るわよ。〕

- (6) 都 唔知 幾時 會 出翻嚟 㗎。快 嘅 一個星期 就 出翻㗎。

全く 〔否定〕-知る いつ 〔可能性〕 出る-戻る-来る SP 速い 1週間 すぐ 出る-戻る-来る

慢 嘅 會 成個月 㗎。(網)

遅い 〔可能性〕 1ヶ月も SP

〔いつになったら出て来るんだか、さっぱりわからない。早ければ一週間で出て来るし、遅ければ1ヶ月もかかるんじゃないかな。〕

- (7) 如果 你 唔介意 嘅，不如 坐喺度 等吓， 等 佢哋 翻㗎！

もし あなた 〔否定〕-気にする 何なら 座る-いる 待つ-ちょっと 待つ 彼ら 戻る-来る

(黄・下 143)

〔もしかまわなければ、座って彼らが帰って来るのを待ってみたら。〕

- (8) 你 唔信 嘅，咪 入 房 睇吓！(香 55)

あなた 〔否定〕-信じる ~じゃない 入る 部屋 見る-ちょっと

〔信じないなら部屋に入って見たらいいじゃないか！〕

管見の限りでは、このように“嘅”に条件節を形成する機能があることを指摘した研究は従来ない。³したがって、まず2.節において“嘅”が条件節を導く機能を持つことを実証することから始める。続いて3.節で、条件節標識の“嘅”が構造助詞の“嘅”が機能を拡張させてできたものであることを論じる。

2. 条件節を形成する機能

この節では、まず“嘅”が条件節を形成する機能を持つという点を明らかにする。なぜなら、“嘅”に対して、それが本当に条件節を形成する機能を果たしているのか、条件文の意味は“嘅”の作用によるものではなく、複文全体の意味から生じているのではないかという疑問もあり得るからである。というのは、広東語では、例えば Matthews and Yip 1994: 301-307 が指摘するように、特別な標識が無くとも、ただ単に二つの節を並置するだけで条件文を形成することも可能だからである。

3 劉敏芝 2006 では、現代標準中国語の構造助詞“的”（広東語の“嘅”にはほぼ相当する機能語）につながる“底”及びその後身の“的”にかつて（宋代ごろから）仮定節標識の用法があったことが報告されており、本稿で述べる“嘅”の機能拡張の様子と非常に似ている。ただし仮定節標識となったメカニズム及びそれが構成する仮定文の意味的特徴は、本稿が“嘅”について述べたものとは異なる。

- (9) 香港 有 錢 乜嘢 都 買倒。(Matthews and Yip 1994: 301)

ある お金 何 も 買う-[達成]

〔香港はお金があれば何でも買える。〕

また前節の (5) ～ (8) のうち、(8) は“嘅”が無くても十分に条件文の意味を表し得る。

- (10) 你 唔信, 咪 入 房 睇吓!

あなた [否定]-信じる ～じゃない 入る 部屋 見る-ちょっと

〔信じないなら部屋に入って見たらいいじゃないか!〕

したがってこのような例を見ると“嘅”は一見余分な成分のようにも見える。特に“嘅”はこのほかに、文の末尾に接続し命題内容を一般化して述べる発話態度表出機能がある（飯田 2005）ため、このような“嘅”はそういった発話態度を表す文末助詞にすぎず条件文形成には関与しないのではないかと見られよう。

しかしながら、前節の例 (5) ～ (8) のうち (5) (6) では“嘅”を落とすともはや節と節の関係が不明瞭になり、条件文として不適格である。このことからやはり“嘅”自体が条件節を形成する機能を担っていることが確認できる。

- (11) ?? 唔知, 我𨀖㗎。((5) の改変)

- (12) ?? 快, 一個星期就出翻㗎。慢, 會成個月㗎。((6) の改変)

次に“嘅”が導く従属節が条件節を表すという点についてやや詳しく補足する。

上述の議論から明らかになったように、“嘅”は“P 嘅”という条件節を形成し、“P 嘅 Q”「もし P ならば Q」という条件文の形成に関わる。しかし詳細に観察すると、“P 嘅”を含んだ複文は常に条件文になるわけではなく、いわゆる仮定譲歩文（逆条件文とも呼ばれる）「たとえ P でも Q」になることもある。

- (13) (就) 算 唔用 嘅 都 要 俾 10 蚊。

たとえ [否定]-使う も 必要だ 与える 香港ドル

〔(たとえ) 使わなくても 10 ドル払わなければならない。〕

- (14) 出邊 大風大雨, 兩個 女人 究竟 去咗 邊 呀?! 要 出去 嘅,

外 大風大雨 2 CL 女の人 いったい 行く-[完了] どこ SP [意志] 出る行く

都 留低 張 紙仔 吖! 唔翻 嘅, 都 要 講 聲 咯!

も 残す-[残存] CL メモ SP [否定]-戻る も 必要だ 話す 一声 SP

(誘・完: 114)

〔外は大荒れなのに、2 人ともいったいどこに行ったんだ? 出かけるにしてもメモぐらい残したらどうだ。帰らないにしても一言言うべきだろ。〕

このように、“P 嘅”節を含む複文には条件文と逆条件文の両方があり得るのだが、条件文と逆条件文とは共に P を仮定する「仮定文」であるという点で共通しており、両者は P と Q の結び付け方が異なるだけと見ることができる。すなわち、しばしば指摘されるように、前者

が順接、後者が逆接関係を表すという指標で区別される違いがあるものの、共に P を仮定的に捉える仮定文として（P を事実に捉える理由文や事実に譲歩文とは対立的に）見なすことができるのである⁴。このように両者は仮定文である点で共通しているのだが、広東語の場合、条件文では上述の通り必ずしも特別な標識が必要ではないが、逆条件文では主節に“都”「も」が必要になることから、仮定文の中では順接の条件文を表すのが無標で、逆接の逆条件文を表すのが有標であると考えるのが妥当である。“P 嘅 Q”という仮定文もまた然りである。

(15) 你 用唔用 呢 部 電腦 呀? 用 嘅, 要 俾 300 蚊。

あなた 使う-[否定]-使う この CL PC SP 使う 必要だ 与える 香港ドル

唔用 嘅, 都 要 俾 10 蚊。

[否定]-使う も 必要だ 与える 香港ドル

[このパソコン使いますか? 使うなら 300 ドル払わなければなりません。使わなくても 10 ドル払わなければなりません。]

このようなことから、あらためて以下では“P 嘅”については無標の条件節の方で代表させて、条件節を表す機能を持つと規定する。“P 嘅”を含んだ仮定文全体が条件文になるか逆条件文になるかは、主節の側に副詞“都”「も」が現れるかどうかによって自動的に決まってくることであり、取り立てて区別しないこととする。

3. 機能拡張メカニズム

前節では“嘅”が条件節を形成する機能を持つことを指摘したが、続いて本節では、この条件節を形成する“嘅”（条件節標識“嘅”）が1.節で述べた構造助詞“嘅”が機能を拡張させてできたものであると考え、その機能拡張のメカニズムを論じる。

なお、本稿で述べる機能拡張とは、文法化の周辺のケースとして扱われることのある多機能化（大堀 2002:186-187、大堀 2004 参照）のことを指す。大堀 2002:184-187 や大堀 2004 では、一般に文法化は自立性を持った語彙項目が付属語となって文法機能を担うようになる変化のことを典型的に指すが、もとより文法形式であったものがさらに拡張されて異なる機能を担うようになる多機能化についても文法化の周辺のケースとして考えられるとの見解が述べられており、本稿もその見解に基づく。

それでは以下に構造助詞“嘅”から条件節標識“嘅”への機能拡張メカニズムを考察するが、その前に構造助詞“嘅”の機能について再度述べておく。

前述したように“嘅”は連体修飾語句（M）と中心語の名詞（N）とをつなぐ働きを持つ文

4 条件文と逆条件文が前件を仮定的に捉える点で共通し、前者が順接、後者が逆接という指標で区別されるところ考えるのは、日本語さらには他の言語の研究においても受け入れられた見解である。（有田 2006 による条件研究概観を参照。）

法形式である。

(16) 佢 借 俾 我 嘅 書 [M 嘅 N]

彼 貸す ～に 私 の 本

[彼が私に貸してくれた本]

中心語（ここでは“書”）が落ちた場合は「～するの／～するもの」という事物を表し、本稿ではこの構造“M 嘅”を名詞化構造と呼ぶことにする。

(17) 佢 借 俾 我 嘅 [M 嘅]

彼 貸す ～に 私 の

[彼が私に貸してくれたの（もの）]

ここで一点留意しなければならないのは、広東語において“嘅”による連体修飾構造“M 嘅 N”並びに名詞化構造“M 嘅”が表すのは、類的ないし総称的（generic）な事物であり、特定（specific）の事物ではないという点である（Lee and Yiu 1998 や Fung 2000 など）⁵。

(18) ?? 佢 借 俾 我 嘅 書 唔見咗。(Fung 2000 : 143)

彼 貸す ～に 私 の 本 無くなる-[完了]

[彼が貸してくれた本が無くなった。]

(19) 大 嘅 三蚊, 細 嘅 一蚊。(Fung 2000 : 144)

大きい の 香港ドル 小さい の 香港ドル

a. The big ones cost \$3 (each), the small ones \$1 (each).

b. *The big one costs \$3, the small one \$1.

結論から言えば本稿では、このような総称的事物“M 嘅”のうち M が動詞句／形容詞句からなる“VP/AP 嘅”が主題（topic）となった題述文“VP/AP 嘅 Q”「VP する/AP であるものは Q」が再分析（reanalysis）を受けて条件文“VP/AP 嘅, Q”「VP する/AP であるならば Q」と解釈された結果生じたのが“P 嘅”条件節であると考ええる。

それではなぜそのような再分析が起こったのか、まずは意味的な根拠について述べる。

すぐ上で述べたように“M 嘅”は類的・総称的事物を表すのであるから、M が動詞句／形容詞句からなる“VP/AP 嘅”も「VP するもの」、「AP であるもの」という総称的事物を表す。ゆえに、“VP/AP 嘅”を主題にした題述文“VP/AP 嘅 Q”は、「VP するものは Q だ」、「AP であるものは Q だ」のように、「VP する」、「AP である」という属性を満たすようなあらゆる事物について Q という題述が成り立つことを述べた総称文となる。総称文が条件文と似ているというのは通言語的にもよく指摘される一般的な見解であるが⁶、このような総称的題述

5 特定の事物を指すためには類別詞を用いた表現を使わなければならない。（Lee and Yiu 1998, Fung 2000 など）

6 総称性（genericity）についての導論である Krifka et al. 1995 : 49 や同 52 では、（特徴づけの）総称文が条件文と似ていると述べられ、次の例が挙げられているので参照されたい。総称文“A lion has a bushy

文からは次のような条件文が導出できる。すなわち、もし（ある任意の個体 x について）「VP する |あるいは「APである」ならば、（その x については）Qである。

具体例で見てみよう。

(20) 用 嘅 要 俾 300 蚊。

使う 必要だ 与える 香港ドル

「使う者は300ドル払う必要がある。」

この総称的題述文が正しい場合は自動的に次のことが成り立つ。任意にある x という個体(人)を取り上げ x について「使う」ことが成り立つなら、 x については Q 「300 ドル払う必要がある」。つまりこの総称的題述文からは「(個体 x について) 使用するならば、300 ドル払う必要がある」という条件文が導出されるのである。ここでは任意に一人の個体 x を取り上げたが、それが全ての個体におしなべて当てはまるというのが総称的題述文“VP/AP 概 Q ”の意味するところである。このように総称的題述文“VP/AP 概 Q ”「VP するもの /AP であるものは Q だ」は条件文「(任意の x について) VP する /AP であるならば、(x は) Q だ」という解釈を生み出す意味的基盤をそもそも潜在的に有しているのである。⁷

そして、このような条件文の解釈が生じると共に、形式面で次のような再分析が起こったと考えられる。

(21) [1] 題述文 VP 嘅 Q。 → [2] 條件文 (x) VP 嘅, (x) Q。
主 題 題 述 命 題 [條件節標識] 結 尾

動詞句（VP）や形容詞句（AP）は（例えば名詞句や前置詞句などとは異なり）述語としてそれだけで命題を構成することができる。そのため、上記のような条件文の解釈が生じるに当たり VP/AP が命題を構成するものとして捉えることが可能になる。その結果、元来 “VP/AP 概” という主題名詞句の構成素であった “概” が VP/AP から切り離して捉えられ、命題に後続し条件節を形成する標識であると見なされるようになったのである。

(21) の再分析を具体例で述べると次のようになる。

(22) 用嘅 要俾 300 蚊。 → 用嘅, 要俾 300 蚊。

[1] 使う者は 300 ドル払う必要がある。 [2] 使うなら 300 ドル払う必要がある。

(23) 你唔愛嘅 我愛。 → 你唔愛 嘅，我愛。

[1] あなたが要らないものは私がもらう。 [2] あなたが要らないなら私がもらう。

このような総称的題述文から条件文への再分析は、(22) (23) のような二義的に取れる例に

tail.”は条件文“If something is a lion, it has a bushy tail.”と言い換えられる。また、坂原 1985：137「総称文は様々な点で条件文と類似している。」「総称文を全称限量化された文と考えるのは一般的見解である。」も参照。

7 ただし「VP する」は「(これから) VP する」という未然事態を表し「(既に) VP した」あるいは「(今既に) VP している」という已然事態を表さないと見られる。この点については今後さらに掘り下げて検討したい。

において、類全体の特性を言う述べ方（総称的題述文）から類のうちの任意の個体 x に着目した述べ方（条件文）へと視点の切り替えが起こったことによってもたらされたのではないかと考えられる。そしてこのような再分析の例が積み重ねられた結果、“嘅”は条件節標識としての機能を獲得したのである。

“嘅”のそのような条件節標識の機能が明確に確認できるようになるのは、(22) (23) のような（文脈が無ければ）二義性を持ち得る例ではなく、以下のように特定の個体に言及する文脈があることによってもはや一義的にしか解釈できない例においてである。

(24) 你用唔用呢部電腦呀？ 用嘅，要俾 300 蚊。唔用嘅，都要俾 10 蚊。((15) 再掲)

[あなたはこのパソコン使いますか？ 使うなら 300 ドル払わなければなりません。
使わなくても 10 ドル払わなければなりません。]

(24) の下線部は (22) と同じ文ではあるが、この文脈では特定の個体“你”「あなた」について述べていることが明らかなため、もはや条件文（すなわち (22) の [2]）にしか解釈できない。

このような用法を通じて“嘅”が条件節標識であると認識されるようになると、形式の上で総称的題述文との二義性を持たない条件文までが“嘅”によって形成されるようになり、用法の拡大が見られる。⁸例えば次のような例である。

(25) 你唔信嘅，咪入房睇吓！（香 55）((8) 再掲)

[信じないなら部屋に入って見たらいいじゃないか！]

(26) 發仔，點 吓？ 要 打 人 嘅，就 同 爸爸 講 聲 拜拜 先 啦……

どう SP [意志]殴る 人 ～と 父さん 話す 一声 バイバイ まず SP

(黄・上 90)

[発仔、どうだ？ 人を殴ろうというのならまずお父さんにさよならと挨拶してからに
しなさい。]

また“嘅”は条件節標識となった結果、条件節を明示する接続詞“如果”「もし」と共起することも可能になっている。

(27) 如果你唔介意嘅，不如坐喺度等吓，等佢哋翻嚟！（黄・下 143）((7) 再掲)

[もしかまわなければ、そこで座って彼らが帰ってくるのを待ってみたら。]

4. “嘅” 条件節の特徴

2. 節、3. 節での考察から“嘅”には条件節を形成する機能があり、それがどのようにして生

8 このような用法の拡大は類推（analogy）の作用による。Hopper and Traugott 1993: 32-62 では文法化現象において連辞的（syntagmatic）レベルの変化である再分析と、範列的（paradigmatic）レベルの変化である類推（一般化）の果たす作用（ないし相互作用）が詳しく論じられているので参照されたい。

じたものなのかが明らかになった。本節ではこの“嘅”の条件節標識としての特徴をもう一つの別の条件節標識“嘅話”「～なら」と比較しながら考察したい。

“嘅話”もまた節末に生起し条件節を形成する条件節標識であり、“嘅”のように使われる。

(28) 快嘅話，一個星期就出翻嚟。…… (6) の改変

[早ければ一週間で出て来る。]

(29) 唔信嘅話，咪入房睇吓！…… (8) の改変

[信じないなら部屋に入って見たらいいじゃないか！]

“嘅話”は見ての通り、構造助詞“嘅”「の」+“話”「話」、すなわち「～の話」という実質的な語彙的意味を持った形式である。これがどのような文法化のプロセスを経て条件節標識となったのかを考察することは本稿の趣旨ではないが⁹、条件節標識として“嘅話”は文法化の度合いが非常に高い。一方、本稿で考察している“嘅”は条件節標識としては文法化の度合い（厳密に言えば多機能化の度合いであるが、本稿では多機能化も文法化の周辺のケースと見なす立場からこれも文法化の度合いと呼ぶ）が相対的に低い。そもそも、1. 節や2. 節で述べたように“嘅”に条件節標識の機能があることが十分に認知されていないことからして、その条件節標識としての成熟度の低さが伺い知れよう。このように“嘅”が条件節標識としての文法化度合いが相対的に低いというのは、“P 嘅 Q”条件文がその機能拡張の由来となった総称的題述文“M 嘅 Q”の統語的・意味的特徴を色濃く引き継いでおり、それらから自由ではないということの表れであるのだが、以下にこの点を“嘅話”と比較しつつ述べたい¹⁰。

1. 統語的特徴

“嘅話”と“嘅”との条件節標識としての差異を顕著に示す点としてまずその統語的振る舞いの差がある。

“P 嘅話”は例えば後から思い出して言い足す場合のように、帰結を表す主節の後に倒置させることができ、その場合も依然として条件節の意味を表すことができる。

(30) 一個星期就出翻嚟，快嘅話。

[一週間で出て来る。早ければ。]

(31) 咪入房睇吓！唔信嘅話。

[部屋に入って見たらいいじゃないか！信じないなら。]

他方、“P 嘅”はたとえそのような言い足しの場面であっても、帰結を表す主節の後に置く

9 “嘅話”は標準中国語に存在する条件節標識“的话”の広東語における逐語訳形式である。標準語の“的话”については張誼生 2001 でその文法化メカニズムが論じられている。

10 Hopper and Traugott 1993: 3, 90-93 ではある形式が文法化するとき、もともとの語彙的意味特徴がずっとその形式に引き継がれることを持続性 (persistence) と呼んでいるが、このようなことが本稿で議論している構造助詞“嘅”から条件節標識“嘅”への機能拡張にも同様に見られるのである。

ことができない。

(32) *一個星期就出翻嚟，快嘅。

(33) *咪入房睇吓！唔信嘅。

このように“P 嘅 Q”条件文は、依然としてその機能獲得の由来となった総称的題述文“M 嘅 Q”の統語的特徴を引き継いでおり、“P 嘅”部分を Q に後置することができないのである。

2. 意味的特徴

次に意味的特徴の面で、条件節標識“嘅”が総称的題述文“M 嘅 Q”の特徴を引き継いでいることを述べる。

結論から述べると、“P 嘅 Q”条件文は、総称的題述文“M 嘅 Q”の意味特徴を引き継ぎ、〈法則性〉を中心的意味とする条件文であるというものである。

〈法則性〉というのは P が成立する場合に Q が必ず成立するという規則性のことを指すのであるが、一見するとこれは一般にどのような条件文にとっても中心的な意味だと思えるかもしれない。しかし、実際の自然言語の条件文では、少なくとも“P 嘅話”条件文に関しては、必ずしも〈法則性〉が中心的意味であるとは言えない。通言語的に条件文とはどのような意味を有するものなのかを議論することは本稿の趣旨ではないが、Haiman 1978 が述べる、条件文における条件節というのは題述文における主題 (topic) に似ているという至極もったもな主張は、少なくとも条件文が全て〈法則性〉を中心的意味としているわけではなく、それは条件文の一面に過ぎないことを示唆している。Haiman 1978 は条件節と主題句とは共に対話において双方が共有する情報で、いうなれば前提であり、後続する談話に備えて枠組みを設定し、談話を進行させる土台をなすようなものであると述べている。

このように条件節が（主題と同様）共有情報なり前提なりであるという性質は、“P 嘅話”条件文においては十分に見られる。その反映として、上述のように（以下に再掲）、条件節部分を後から付け足すことが可能な点が挙げられる。

(34) 一個星期就出翻嚟，快嘅話。〔一週間で出て来る。早ければ。〕

(35) 咪入房睇吓！唔信嘅話。〔部屋に入って見たらいいじゃないか！信じないなら。〕

このような倒置が可能なのは、これらの条件文の例において情報的に大事なのは前提や共有情報（旧情報）を構成する条件節“P 嘅話”の方ではなく、新情報を構成する主節 Q の方からである。条件節“P 嘅話”の付け足しは話者が自分の言明をより正確にするため補足的にたまたま行っただけで、ひょっとすると行わなかった可能性もあろう。

しかしながら、“P 嘅 Q”条件文はそうではない。“P 嘅 Q”条件文は「P であれば例外なく Q である」のような〈法則性〉を中心的意味とし、P と Q との関連を述べることに重点があり、むしろ“P 嘅 Q”という文全体に情報的価値がある。むしろ条件文である以上、条件節“P 嘅”部分が帰結を表す主節にとっての前提であるという性質は多かれ少なかれ持つてはいるが、旧

情報として完全に背景化され、主節 Q への後置が可能になるほどではない ((32) (33))。

このほか、“嘅話”と“嘅”とは共に条件節を形成する機能があるものの、前者と比べ後者を用いた条件文は語気が鋭いと判断する母語話者が複数いるが、そのような語気の鋭さもまた〈法則性〉の述べ立てという意味的特徴に起因すると考えられる。

例えば再三例に挙げた次の文についての母語話者の語感¹¹は示唆的である。

(36) 快嘅一個星期就出翻嚟。(網)

ここで条件節を“快嘅話”(“P 嘅話”)とすると、「早ければ、1 週間ぐらいかな」のように「早ければ…」の後に少し帰結を考えるゆとりが生じ、帰結にも曖昧な口調が馴染むのに対して、“快嘅”(“P 嘅”)とすると、「早ければ一週間だ」と即時的で断言的な口調になるという違いがあるという。

以上で述べてきたように、“P 嘅”条件文は〈法則性〉を中心的意味とすると見られるのであるが、このような意味的特徴はほかならぬ総称的題述文“M 嘅 Q”に由来するものである。なぜなら総称的題述文“M 嘅 Q”とはまさに「M という属性を持つものは Q である」のように法則を述べる文だからである。他方、“P 嘅話”については、本稿では詳しく考察する用意は無いが、「～の話」というそのよって来たる語彙の意味からして、現実とは別に何らかの仮定的世界(仮定の話)を構築してみせるという意味を中心としていると思われる。その点で有田 2006 で述べられている条件文のプロトタイプに符合しており¹¹、まさにそのために話者にも条件節標識として“嘅”より典型的な形式と認知されているのだと考えられる。¹²

このように“嘅話”は条件節標識として文法化度が高い一方、他方の“嘅”は条件節標識としては相対的に文法化の度合いが低く、それがよって来たるものの総称的題述文“M 嘅 Q”の統語的・意味的特徴を依然として色濃く残している。このように“嘅”が条件節標識としての文法化の度合いが低い一因としては、同じく節末という環境に出現し、同様の機能を持つ条件節標識“嘅話”が既に確固として存在するため、“嘅”の条件節標識としての用法の拡大が一定以上広がるのが抑えられるからで、一種の同義語衝突(synonymic conflict)¹³であると考えられる。同義語衝突は語形成という語単位のレベルで想定される現象であるが、本稿で述べ

11 有田 2006 では、条件文は「前件 P が成立する世界を仮定し、その仮定世界での後件 Q の成立を推定するような関係を表す」ような文をプロトタイプとして持つ構文カテゴリーであるとの仮説が提示されている。

12 このほか、“嘅”を用いた条件文“P 嘅 Q”は実例を観察した限りでは、P が他の仮定世界と対比的に取り上げられる文脈でしばしば現れると見られる。この点は注 3 で述べた近代中国語の構造助詞“的”の条件文にも見られるという(劉敏芝 2006)。これは“嘅”(ないし“的”)が構成する名詞化構造“M 嘅”「M の」が、連体修飾語構造“M 嘅 N”「M の N」から中心語 N が脱落した形式であることに起因して、N という背後にある母集団が常に想定されるからと考えられる。このように“P 嘅 Q”条件文が対比的文脈を好むという性質が実際にあるのかどうかについては、まだ本稿では十分に議論する準備ができていないため、今後の検討課題としたい。

13 亀井ほか 1996 : 980-981 参照。厳密な意味において完全な同義語は存在しないという想定があるため、生産的で規則的な派生方法による語形成が既にそれと同じ意味の単語が存在しているために阻止されるケースを指す。

ているような節単位のレベルにおいても当てはまる。つまり、“嘅話”という条件節標識が既に存在する以上、それと同じ条件節標識の機能を持つ“嘅”は特別な意味機能上の差異や文体的差異などがない限り存在し続けることが難しいのである。そのため、“嘅”条件文は〈法則性〉という制約から自由になれないのである。

5. おわりに

本稿は広東語で連体修飾語と中心語とをつなぐ働きを持つ構造助詞“嘅”が条件節を形成する機能を獲得していることを指摘し、続いてその機能拡張のメカニズムを明らかにした。最後にこの条件節標識“嘅”の統語的・意味的特徴をもう一つの別の条件節標識“嘅話”と比較しつつ検討した結果、“嘅”は相対的に文法化の度合いが低く、“P 嘅 Q”条件文はその機能拡張の由来となった総称的題述文“M 嘅 Q”の統語的特徴及び意味的特徴〈法則性〉の制約を依然として受けていることを述べた。

参考文献

- 有田節子 2006. 「条件表現研究の導入」, 『条件表現の対照』: 3-28 頁。東京: くろしお出版。
- Fung, Roxana Suk Yee. 2000. *Final particles in Standard Cantonese: Semantic extension and pragmatic inference*. PhD Dissertation, Department of East Asian Languages and Literatures, The Ohio State University.
- Hopper, P. J., and Traugott, E. C. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Haiman, J. 1978. Conditionals are topics, *Language* 54, 564-589.
- 飯田真紀 2005. 「広東語の文末助詞」, 博士学位論文。東京: 東京大学。
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編著) 1996. 『言語学大辞典 第6巻・術語編』。
- Krifka, M., Pelletier, F. J., Carlson, G. N., ter Meulen, A., Link, G., Chierchia, G. 1995 Genericity: An Introduction. In G. Carlson and F. Pelletier, (eds.), *The Generic Book*. Chicago: The University of Chicago Press, 1-124.
- Lee, Thomas Hun-tak and Yiu, Carine. 1998. Final ‘de’ and ‘ge3’ —— a nominalization analysis for cleft sentences in Mandarin and Cantonese. Paper presented on December 5-6, 1998, Annual Research Forum of Linguistics Society of Hong Kong.
- 劉敏芝 2006. 宋代結構助詞“底”の新興用法及其來源〈中國語文〉第一期: 59-64.
- Matthews, S., and Yip, V. 1994. *Cantonese: A Comprehensive Grammar*. London: Routledge.
- 大堀壽夫 2002. 『認知言語学』。東京: 東京大学出版会。
- 大堀壽夫 2004. 「文法化の広がり」と問題点, 『月刊言語』4月号: 26-33 頁。
- 坂原茂 1985. 『日常言語の推論』。東京: 東京大学出版会。
- 張誼生 2001. 「説“的話”」, 『現代中国語研究』第3期: 70-81 頁。

用例出典

※出典記載がないものは作例にネイティブチェックを受けたものである。出典後の数字は出現したページを表す。本稿中での漢字表記を統一させるため、適宜、出典元と異なる漢字表記を施してある。

(網): インターネットで得られた例文を適宜改作しネイティブチェックを受けたもの。

(香): 《香港製造》陳果編劇 1999 香港: 香港電影編劇家協會。

(森)：《森之愛情》森美 2007 香港：皇冠出版社。

(黄・上)：《黄金少年 season1 上集》商台製作有限公司，火火編劇 2006 香港：青春文化。

(黄・下)：《黄金少年 season1 下集》商台製作有限公司，火火編劇 2006 香港：青春文化。

(誘・完)：《誘惑年月日 完結篇》鄭丹瑞原著 李瀨編劇 1998 香港：商台製作有限公司。

付記

※本稿は文部科学省科学研究費若手研究(B)「広東語の談話モダリティの研究——意味機能と音声の相関に着目して」(課題番号19720086、研究代表者：飯田真紀、2007-2009年度)及び平和中島財団アジア地域重点学術研究助成「広東語・客家語・閩南語の比較文法研究——中国語南方方言の文法化・機能拡張メカニズムの比較対照——」(2008年度)の研究助成を受け、2008年12月18日になされた第十三屆國際粵方言研討會(香港城市大學)での口頭発表“粵語結構助詞“嘅”向條件分句標記轉變的功能擴張”に基づき、様々な加筆・修正を行ったものです。本稿の執筆にあたっては、査読委員の先生方から非常に有益なコメントをいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

(2009年7月6日受理、2009年8月19日最終原稿受理)

粵語的條件分句標記“嘅”

飯 田 真 紀

《提要》

本文首先指出粵語中原本具有名詞化功能的結構助詞“嘅”成為了構成條件分句的標記(marker)，進而採用語法化理論試圖闡明其功能擴張的機制，並得出以下結論：以 VP/AP 嘅”這種名詞化結構做話題(topic)的句子受到重新分析(reanalysis)被解釋為條件句的時候，原本是名詞化標記的結構助詞“嘅”也隨之被分析為假設命題 VP/AP 的標記。產生這種重新分析的語義動機如下：由於“VP/AP 嘅”這種名詞化結構表示的是泛指(generic)事物，而不是特指(specific)事物，在此意義上“VP/AP 嘅～”這一句式也可算是一種泛指句(generic sentences)。而泛指句被普遍認為具有條件句的性質，因此“VP/AP 嘅～”這一句式也就容易產生出條件句的解釋。這種用法經過反覆出現，結構助詞“嘅”最終發展出了構成條件分句標記的功能。

本文在最後一節中，還考察了“嘅”與“嘅話”作為條件分句標記的差別，認為前者相對來說其語法化程度不高，仍然受著泛指句特有的語義和句法上的制約，即“嘅”條件句具有相當強的〈定律性／法則性〉。